

新型コロナ感染症の脅威が全世界に拡大するなか日本の感染状況も、爆発的感染の一步手前という厳しい状況にあります。政府の非常事態宣言が全国に発出され、5月6日までは、7割から8割の外出自粛をするよう強く訴えられています。ただ連休が明けても宣言が解除され、いつもの授業や講義を開始できるという見通しは定かではありません。

そのようななかで4月14日（火）午後4時から、末光学長の手配により東北大学データ駆動科学・AI教育研究センター長早川美徳教授を講師とする「インターネット授業の留意点」という講演と質疑応答の時間が持たれました。この講演そのものがZOOMによる遠隔講義形式で持たれ、チャットによる質疑応答もなされたことは画期的なことでした。告知期間が短かったにもかかわらず、実に176名もの方々が参加されたことから、コロナ禍のなかで教育研究を維持継続していくためには、遠隔講義への取り組みが背に腹は代えられない喫緊の課題となっているということは明らかです。

わたし自身も初めての経験ですから、そもそもパソコン画面を順調に起動できるだろうとおっかなびっくりでした。首尾よく画面が開くと、次々と先生方の顔が画面一杯に現れるのにびっくりさせられました。そんな初心者にも早川先生が、とても分かりやすく丁寧にお話をしてくださったことによりZOOMを用いることへのハードルが大分低くされたことでした。多分、このソフトを使いこなしていけば、とても便利な機能がたくさんついているのですが、初めの一步となったこの研修の時にも、チャットを用いて円滑に質疑応答がなされたことにとても感心させられたことです。

前任校の青山学院大学時代には講義の終わりに「質問のある人」と問いかけても、まず手を挙げて問いを発する学生はいませんでした。赴任して3年目に同僚からアドバイスを受け、出席カードに質問や意見を書くように伝えたと、少なからぬ学生が簡にして要を得た鋭い意見や質問をぶつけてくれるようになりました。それからは次の講義の冒頭でいくつかの質問を紹介しつつ、応答することができるようになり、学生との双方向的な講義が多少なりとも成り立つようになったのです。

その経験を思い起こすにつけ遠隔講義のチャット機能は、対面講義よりもはるかに容易に学生と教員との双方向的な関係を豊かにする可能性があると思わされたことです。先日は、チャットで発信した人の名前が画面に出されましたが、もし、これを匿名化することができるなら、学生にとっては飛躍的に質問することへのハードルが低くなるに違いありません（そのことを単純に教育的に良いとは言えません）。しかもチャットの内容が、クリック一つで自動的に保存されるというのですからすぐれものです。遠隔講義、侮るべからずとの思いを抱かされたことでした。

同時に私自身は、学生数においては対照的な二つの大学で学んだ経験を通し、少人数による対面講義や演習の意義深さというものを骨身に沁みて思い知らされてきました。早稲田での講義は少ない場合でも100名、多いときには300名～400名程度の大人数で持たれたことでした。二年間のサラリーマン生活を経た後、日本で一番小さな東京神学大学の学部3年に編入しました。学年全体で13名の在籍者しかいませんでした。すべからずすべての講義は演習同然となりましたが、振り返ってみるとその時に本を読むこと、考察すること、考えたことを言語で正しく表現をすることの基本的な訓練を徹底的に叩き込まれたとの思いを強くさせられます。もちろん、先生方の学識の深さと信仰の敬虔に触れ、深い感化と敬愛の念も抱かされたことは、なににも代えがたい人生の宝となりました。

これから教育界は、一気に遠隔講義へと振り子が振れることでしょう。宮城学院もピンチをチャンスに変えて、遠隔講義の潜在的な可能性や長所を十分に取り入れていかなければなりません。しかし、どんなに時代が進んだとしても、教育の基本としての人格と人格の触れ合いやそのことによって学びの深化がもたらされる対面講義の重要性を決して疎かにしてはならないでしょう。気が早いと思われるかもしれませんが、コロナ禍を克服した後に、遠隔か対面かを判断することが求められる時、心に留めたいことは、次のような使徒パウロの言葉です。「わたしは、こう祈ります。知る力と見抜く力を身につけて、あなたがたの愛がますます豊かになり、本当に重要なことを見分けられるように。」（フィリピ1：9-10a）